

# 「作業療法の創造的破壊のための哲学」

京極 真（吉備国際大学）



作業療法は作業を通して健康と幸福を促進する実践ですが、そもそもこれは哲学的実践論です。理由は、歴史をふり返ると、作業療法の中心概念である作業（occupation）が哲学用語でして、作業療法の創始者たちはそれを軸に療法を組み立てたからです。作業療法士にとって、哲学はルーツであると言えます。

作業療法の歴史をふり返ると、大きな転換点が3回あります。1つめは、プラグマティズム、道徳療法、アーツ・アンド・クラフツ運動の合流点に作業療法が誕生したことです。2つめは、作業療法が要素還元主義の洗練を受けて、医学化が進んで作業を使わなくなったことです。3つめは、その反省から原点回帰を掲げて、作業に根ざした実践が台頭したことです。現代は3つめの転換点にいまして、作業療法士は本来の作業療法を実質化するために奮闘しているわけです。

実のところ、この3つの転換点は哲学からの影響を強く受けています。作業療法の誕生は、作業という視点を生んだプラグマティズムから直に影響されています。それまで、作業療法は道徳療法、アーツ・アンド・クラフツ運動の元で展開してきましたが、作業を通じた治療としてガツンと変革が起こっています。見方を変えると、ここで一度、哲学による作業療法の創造的破壊が起こっていることとなります。それはこの後も続きます。上述した、作業療法の医学化は要素還元主義に根ざしたものでした。医学化された作業療法は、作業を通して健康と幸福を促進するという視点を失いましたが、疾患・障害に対応した評価と治療の技術を発展させました。ここでもやはり、哲学が作業療法の創造的破壊に一役かっているわけです。現代作業療法は原点回帰の力動をもっていますが、それは単に過去に戻るというわけではなく、初期の作業療法と医学化された作業療法の融合を志向しているものです。認識論的にいえば、両者は本来相容れないものですが、哲学を武器にすることによって創造的破壊が進みつつあるわけです。

多くの作業療法士にとって、哲学はあまり馴染みがないかもしれませんが、作業療法界を牽引する方々は哲学を武器にこの領域に創造的破壊をもたらしてきました。創造的破壊は作業療法の未来を創るために欠かせないジャンプです。特に日本は高齢化と人口減という人類がかつて体験したことがない難題に向きあっており、従来の作業療法では対応できないクラッシュをもたらす可能性があります。そのため、私は、われわれ作業療法士が哲学による創造的破壊に着手し、新しい時代の作業療法の地図を創り上げる必要があると考えています。講演では、創造的破壊の武器になりえる哲学を紹介しながら論じていきます。